

編集長 : 蛭灰谷愛
編集委員 : 平岡性 増田圭輔 矢原有理 ジャック・ファリス
菊地原徹郎 中島和也 藤井高広**2009年 都市デザイン研究室新年会**
—新年の饗、西村・北沢・窪田演説に酔いしれる—

text_kikuchibara/fujii

1月9日、本郷鳳明館本館にて、2009年の新年会が行われました。現役・OBOG、など大勢が集まった会は大盛況。恒例の一人一言の話題は「去年の自慢」と「今年の抱負」。それぞれが一年をふりかえり、そして新年を胸にマイクを握りました。

2009年1月8日
都市デザイン研究室 新年会**「想像できない世界、
その先に未来がある」**
〈西村幸夫教授演説 要旨〉

この数年のテーマは、君達の優秀な成果を社会に出す後押しをすること。なんとか力になってあげたい思っている。今、「都市空間の構想力」を出版しようと計画しているが、おそらくデザ研の名前で出す初めての本。それはある意味でデザ研のビジョンを日本に世界に発信する、すごく大事な仕事だと思う。そういう仕事はそう出来ることではない。頑張る、一緒にやりたい。

去年から今年にかけて、世の中は驚くべき激変の中にいる。僕自身もオイルショックとか、バブル崩壊を知っているが、おそらくそれ以上ではないかと思う。世の中の仕組みが大きく変わる事だと思う。これは重要な話で、全く新しい社会がおそらく始まってくるだろう。どっちに社会が向かうか？その社会の方向はまだ見えない。その新しい社会に対し、どういうスタンスをとるか、何が大事か、を決めていくのは君達役である。そのビジョンが20年、30年先の社会を決めていくことになる。そういうものすごく大きな潮目の境にいる。君達にはまだわからないかもしれない。しかし、去年とは明らかに違う今年がある。その時に、自分達のプロフェッションの中でどのように動くか。今我々は問われている。誰も知らないし、誰も創ったことがない、誰も想像できない世界である。

この間には君達こそがフレキシブルに考えられるのだ。私達はこの世界に何十年も生きてきているから、社会を動かすににくい。だからこそ君達たちの目で可能性を見つけてほしい。日本の生きる方向があるのかを感じてほしい。そこにこそビジネスがあり、生きる糧がある。そういう方向に今、生きていく人達を少しづつ導いていかなければならない。

おちゃらけた態度をしている場合ではないのだ。自分たちのポジションを考え方向を見定め、その方向に社会を向けていくようなことをしなければならぬ。

この時代の激変は、ある程度前から分かっていた。しかし、殆どの人は気づかなかった。感覚が鈍ってしまっていた。バブルがはじけた後、我々は反省したはずなのに、同じ過ちを繰り返している。いかに我々が鈍感に、世の中の風邪に流されていたか。僕はKYという言葉が嫌いだ。空気なんか読まなくて良い。自分が信じたものを見る。空気の中にいるから、分からなくなる。その中にもこっぴどいえる自分がなければいけない。もっと大きな、何十年先の社会のビジョンを持って、おかしいことをおかしいと感じる感性をもたなければならない。私も反省している。君達も深刻に反省するべきだ。100年に一度のことでも分からない人間が、楽しんでいいのか？我々は、本当に深刻にこの状況を捉えないといけない。この事を考えられる人間が、次世代の道を開いていけるのだ。

これを頑張ることが今年の豊富である。君達にも自分の問題として考えてほしい。それを捉える感性を磨くことはすごく大事なのだ。その感性が自分の生き方の中でどのように結実するのか自分の問題として考える。それを考えることがバックキャストになる。社会の在り方になる。今はまだどうしようという考えはないかもしれない。だがそういう一歩が今年既に始まっている。そういう中にあることを我々は共有したいと思う。

**「都市の将来像、
良くも悪くも考えよ」**
〈北沢猛教授演説 要旨〉

去年サバティカル中に、お店を3店舗増強した。4店舗開設した。今年はもう増やさない。内容をやりたいと思う。アーバンデザインセンターの実証実験をしながら、海外の事例も調べながら、理論的展開を行う研究会を行いたい。都市デザイン業界は先細りだが、やらなければならない。需要はある。しかし、お金が伴わなくなってきた。それを打開するためにも、アーバンデザインセンターをやる。今までのコンサルタントの方法ではなく、地域密着型のアーバンデザインを行うセクションが必要だと考えている。残りの人生をかけて少しやってみよう。

また、環境と都市をどうするか。広い意味での環境に貢献していくことがアーバンデザインには求められている。今までの都市計画や建築の枠組みでは出来なく、アーバンデザインの概念を拡張することで出来るものだと考える。是非、都市デザイン研究室の大きなテーマとして、やりたい、やってもらいたい。環境問題をどのように整理して、都市と結びつけていくか。そのような議論をここから巻き起こしたい。今やっている環境政策は、非常に一面的だと思う。我々の生活の場面としての環境と結びつけられていない。それを結びつけて、提案していくことが重要だと思う。

この2つを、何年かかけて、やっていきたい。

OBOGの顔を見て、幅が出てきたと実感した。だが、柱がない。それぞれがやっている仕事はいいのだが、もう少し長い目でみて、都市がどのようになっていくべきか考えてほしい。バックキャストという言葉があるが、都市計画には近年無くなっている。その場その場の課題解決に負われすぎていて、都市のあるべき姿がイメージできないのが、すごく大きな問題ではないか。それは我々が頑張って、提示していく役割がある。是非トライしてみよう。

ある意味で、西山卯三先生が言っていたことは、正しいと思う。彼はいくつかの将来像を持っており、バックキャストの最初の人であった。京都計画だけでなく、地獄絵を描くということも実践していた。警鐘も鳴らすということも我々の重要な仕事ではないだろうか？現場から発信することは重要であり、デザ研の特徴であると思うが、現場から考えつつ、思い切って将来を提示してみる。悪い面も言い面でも、両面を提示していく役割が我々にはあると思う。社会にでた人も含めて、これに共鳴して一緒にやってほしいと思う。

1年間僕も全力でやりたいと思っているので、一緒に楽しくやりましょう！！

**「野望は山ほどある。
頑張っていきたい」**
〈窪田亜矢准教授演説 要旨〉

さくっと自慢したいこと2つほど。

1つ目の自慢は仕事の話で、秋に大阪の方でジェイコブスのことでお話ししてくれとお願いがあった。しかし私はジェイコブスの専門家でもないし、何をお話しすればと相当色々考えた。頼まれたのが実は西山卯三記念文庫という方々。そこでお褒めの言葉を頂けた。「さすが都市デザイン研究室だ。非常に水準が高くて全体を引っ張っていられているんだ」。OBOGの皆さん方が積み上げてきたことがきちんと評価されてきているのだなということを感じた。

2目目は、家族の話。娘が、この夏に自転車に乗れるようになったのと、25m泳げるようになった。その瞬間に両方立ち会えた。できるまでのプロセスに密に付き合えることができ、娘の感動を共有できた。子供に限らず相手は変化していく。その時に、今の娘との関わり方はうまくできたということを実感できた。だんだん一緒にいられない時間の共有の仕方が、わかってきてきているような気がして、自分の母親として一歩分かった気もしたかな。

抱負。抱負というか野望は山ほどある。だけど1つだけ。今年からついに講義を受け持つことになった。そうした中で改めてスペシャルプランニングとは何かと色々考えていたが、結構わからない。そのとき、ドイツの方々のスペシャルプランニングの勉強会に誘われた。「ドイツでも中身はまだ曖昧だが、私の考え方はこうなんだ」という話し方をしてくれた。考え方自体には納得できなかったが、何か新しい物を捉え、課題化する時に何か名前を付けてやろうとしている状況が少し理解できたという部分があった。

今年は開き直りは、これでいくしかないなということも思っている。今年も頑張りましょう。

2008年度 第12、13回研究室会議

text_fujii

12月16日と1月8日に第12、13回研究室会議が行なわれた。M2はほぼ一ヶ月サイクルで発表を行ない、修士論文の完成へ向けて日々研究を重ねている。毎回着実に進行している研究発表を見てみると、プロジェクトを2年間乗り越えてきたM2の底力を感じる。それを裏付けているかのように「最近では修論の相談に乗ることが多くなった。M2の積極性はすごい。この数ヶ月で恐ろしく成長している。」とD3中島(伸)さん。提出まで残りわずか。更なる進化に期待したい。

第12回

- M2 大道 亮 : 「2001年以降の都市計画道路の見直しに関する研究-岐阜県を事例として-」
- M2 パンノイナツポン : 「住民組織による歴史的町並み観光の運用プロセスに関する考察-千葉県香取市佐原地区を事例として-」
- M2 矢原 有里 : 「地区の変化に応じた保全型まちづくりの展開とまちづくり組織の役割に関する研究(仮)-東京都新宿区神楽坂地区を対象として-」
- M2 Farris Jay

第13回

- D2 江口 久美 : 「フランスの都市の保全的刷新手法における中間団体の活動に関する研究」
- D1 Tchapi Mireille
- M2 蛎谷 愛 : 「都心部まちづくり活動における多主体交流と支援システムの役割に関する研究-東京都千代田区まちづくりサポートを通じて-」
- M2 鎌形 敬人 : 「地場産素材を活用した景観まちづくりに関する研究」
- M2 鈴木 惇也 : 「保険による伝統的建造物の維持管理・防災促進の可能性」
- M2 山田 渚 : 「『都市型船付家屋集落』における、住まい方と空間構造の研究-子安浜を対象として-」
- 研究生 Fu Shulan : 「The Past for Future: National Priority Sites of Cultural Heritage for Conservation in Jiangsu -Graduation Thesis Abstract-」

新制度【コメンテーター制度】導入から1ヶ月 ～制度の意義を考える～

「なんでM1が先輩であるM2の修論にアドバイスしなきゃいけないの?」。新制度【コメンテーター制度】が導入されて早1ヶ月、M1からは、こんな言葉が会話を賑わす。コメンテーター制度とはアドバイスや指導をすることなのか??

野原助教もこのM1の考え方を危惧していた。「(年齢的に)大人だけど変に大人なコメント。何十人(先生)がいるんだ。指導は私たちがするんだからもっと素直にコメントしてほしい」と。コメンテーター制度の本来の意義は、研究室会議を活発にし、各々の研究の考え方を共有することであり、指導人数を増やすことではないのである。制度を通して、修士課程としての率直な意見を研究室会議の場に投げ込み、議論を活発し、研究室全体として意義深い会議にしていくことが私たちに求められているのではないだろうか。

【コメンテーター制度】

研究室会議において、他の人の発表に対して、修士や研究生がコメントする時間をきちんと設けるための制度。
研究室会議とは本来、他の人の研究について考えたり、理解したり、議論したりすることを目的としている。しかし、ここ数年、学生が多く、会議の時間が限られていたこともあって、研究発表に対してコメントするのは、先生方や博士課程の学生が中心となっていた。研究室会議を本来の姿に戻すため、中島助教が中心となり提案し、2008年11月28日導入が始まった。

忘年会

一年の終は博多1本締め

text_fujii

昨年の忘年会は12月25日に、神田にある「Fu」で举行されました。1年間のストレスを爆発させるが如く、会は大いに盛り上がりました。そして、会の最後はやはり、西村教授直伝の博多一本締め。これがなければ研究室は年を越せません。



高山PJ

ー新たな展開、周辺農村調査へー

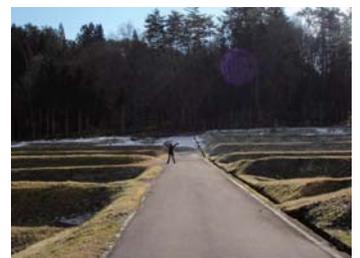
text_fujii

12月19～22日、2008年最後となる現地調査に行ってきました。今回は、城下町である中心市街地から飛び出し、周辺農村集落調査を実施しました。

一色・惣則集落、北方・法力集落、見座・小瀬・立岩集落の3集落を見たいのですが、どの集落も農村の美しい原風景が残っており、高山の新たな魅力を垣間見ることができた気がします。



▲ 誰よりも楽しんでた野原助教



▲ 空を仰ぐM1竹本

読・読・読! 読書会通信

一ふらっと立寄、書を共有

text_fujii

昨年度から始まった中島助教とM1が中心となって起ち上げた読書会。気づけば既に15冊もの本を読破。ますます読書会が活発になること期待したいと思います。そこでM1中心で開催はしているものの、「この本を皆と共有して議論したい!」という方、いつでもどこでも募集しております。是非是非ご参加下さい。

(備考:次回1/26 10:00開催 東京都計画物語 越沢明著 担当:菊地原)



▲ 影で遊ぶ高山PJメンバー



▲ 懸命な調査をするM1土信田

編集後記

text_fujii

最近感動した言葉。「日本一の報告書に。」という意気込み。単純な言葉ですが、高校時代の部活動のことを思い出しました。せめて意気込みだけでも日本一、日頃から心がけていきたいと思う今日この頃です。

都市デザイン研究室 1月の予定

- 1月22日 第14回研究室会議
- 1月29日 第15回研究室会議
- 2月 4日 修士論文提出